兵庫津柳原惣門跡現地説明会資料

（兵庫津遺跡第 29 次調査）

２００２/１０/０６
於柳原蛭子神社境内
神戸市教育委員会

はじめに

平成 12 年度に兵庫区民まちづくり会議と兵庫区役所によって「兵庫区歴史花回道構想」が策定されました。これをもとに区内に所在する史跡等の歴史遺産を復元し、あるいはそれらを顕彰する碑の設置等を行い、「歴史のまち兵庫」を広く知らせ、またそれらを地域の象徴として、まちおこし・まちの活性化に結びつけようとする努力が地元住民の熱意を原動力に各所で進められています。

ここ柳原の地は、元祖神戸港というべき大輪田泊＝兵庫津の町並みの一角にあたり、近世にはその西の入り口として柳原惣門が存在しました。現在、地元住民が主体となり、この惣門をまちおこしのシンボルとして再建する計画が具体化しています。ただ、この惣門は明治時代も古い時期に撤去されているためその正確な位置・規模等の情報が分かっていません。

今回の発掘調査は、柳原惣門の再建にあたり、その基礎的なデータをとり、さらに枡形・都賀堤（とがのつつみ）など、惣門周辺の状況を確認するために行いました。

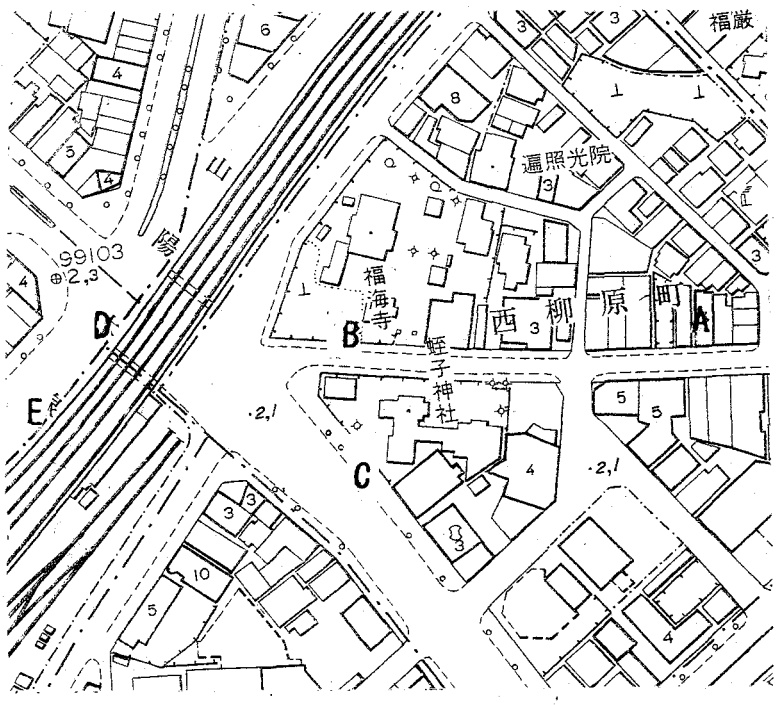


図１　現在の柳原

柳原惣門とは

一言でいえば兵庫津の町の西の玄関口ということになります。

現在の柳原交差点は東西に走るJR山陽線をはさんで八差路となり、周囲には家々が建ちならんでいます（図 1）。しかし、明治十四年の『兵庫県神戸実測図』（図２）を見ますと現在柳原蛭子神社の西にある南北方向の幅の広い道路、都市計画道路会下山線はごく一部を除き存在していません。江戸時代から明治時代初期に存在していた幅の広い道路は、西国街道だけといってよく、蛭子神社と福海寺の間を東西行する（図１・２A-B）この街道は、Ｂ・Ｃ地点で鍵の手に屈曲し、さらに現在の柳原交差点（Ｄ）からJR線の北側を南西へ（E）と続くものでした。

今回発掘調査を行ったのは、東西行する西国街道が南に折れるＢ・Ｃ間に当たります。この屈曲ポイントにかつて柳原惣門が置かれました。近世兵庫津の町の周囲には、都賀堤（とがのつつみ）そしてその外側に堀が廻らされ、不時に備えていました。西国街道が町に入るこの地点はこの防衛線が途切れる地点でもあったわけで、惣門は平時には町の玄関の装飾門となり、不時の場合には町と外部を遮断する防衛線となるという役割がありました。惣門には隣接して番所と高札場が置かれています。街道を鍵の手に屈曲させ、町内を外部から直接見えないようにするのも保安上の故です。

なお、兵庫津内、「札場（ふだば）の辻（つじ）」で西国街道は北に折れ、町の北、湊口惣門を抜けて兵庫津の町を出ることになります。江戸時代、両門ともその外側には家並みはほとんどなく田畠あるいは松原が広がっていました（図５）。

明治時代初期に作成された絵図には、門前に枡形とよばれる広場、その南に都賀堤の外側に廻らされる堀（図３）が描かれています。

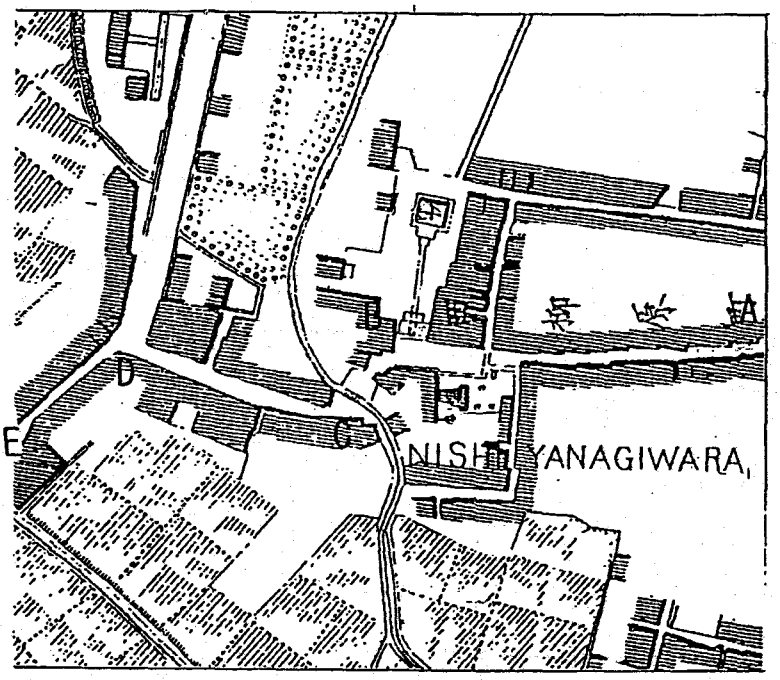


図２　明治十四年の柳原『兵庫県神戸実測図』

柳原惣門が設置・撤去された時期については明確な記録がありません。しかし都賀堤については池田信輝によって、天正八年（1580）、兵庫城の築造時に外輪堤として築かれたものであることがわかっています。おそらくこの際に関門として設置されたものでしょう。

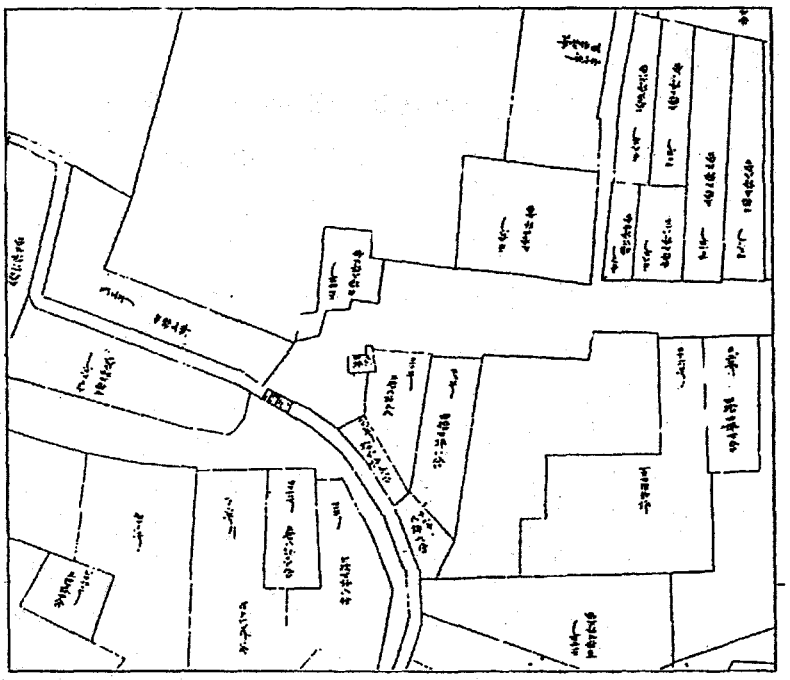


図３　明治初年の柳原惣門付近『西柳原町沽券地絵図』

明治二年（1869）の『兵庫津細見全図』（図４）には柳原惣門が描かれていますが、明治十四年（1881）の地図（図２）には惣門が描かれていません。この間に取り壊されたものと推測されます。明治八年（1875）に都賀堤が削平されていますので、この時に惣門も撤去されたのでしょう。

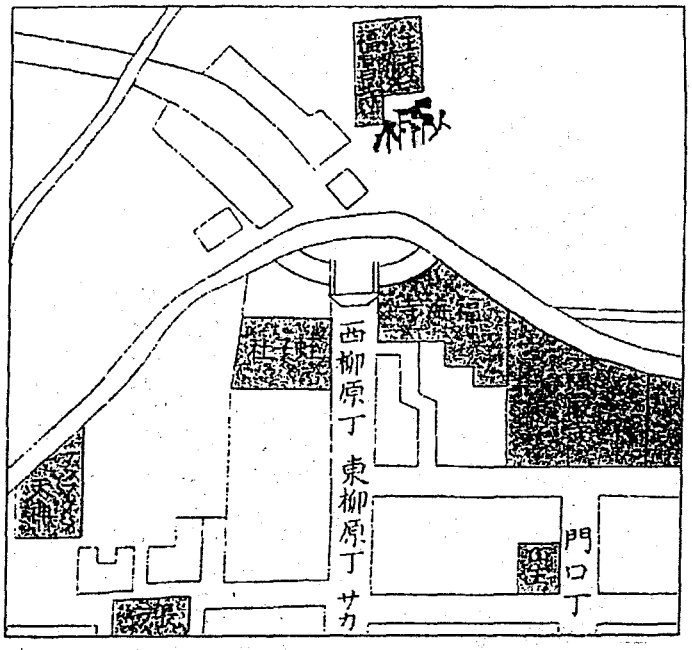


図４　明治二年の柳原惣門付近『兵庫津細見全図』

調査成果

今回の調査地は現在蛭子神社の境内となっていますが、ここは前述しましたように、江戸時代には西国街道として、明治時代以降も太平洋戦争後の区画整理が行われるまで道路として利用されていました。そのため、管の埋設や溝の掘削が多く、江戸時代の道路面と推定される黄色粘土による舗装面はごくわずかしか残されていませんでした。

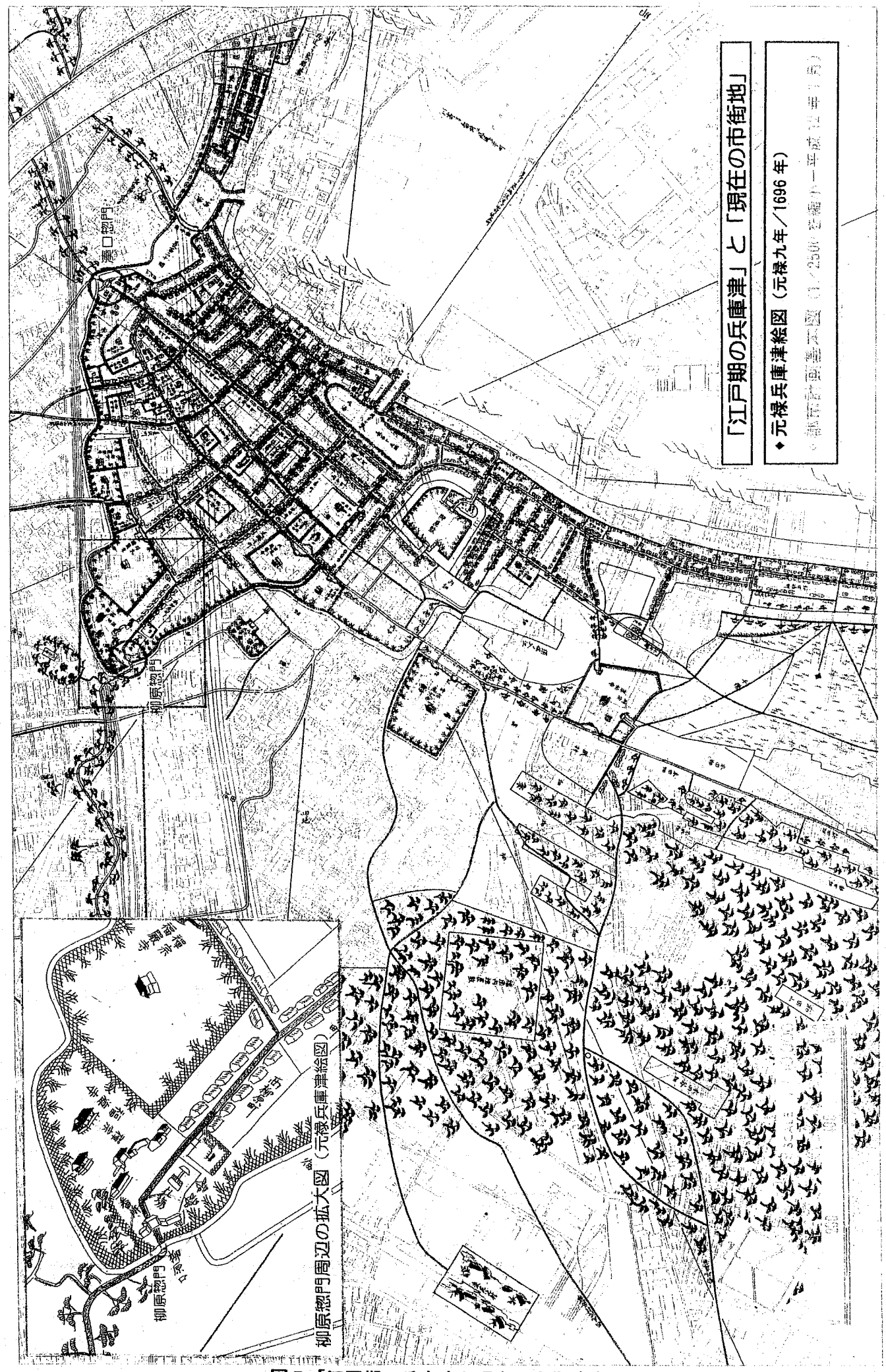


図５「江戸期の兵庫津と現在の市街地」

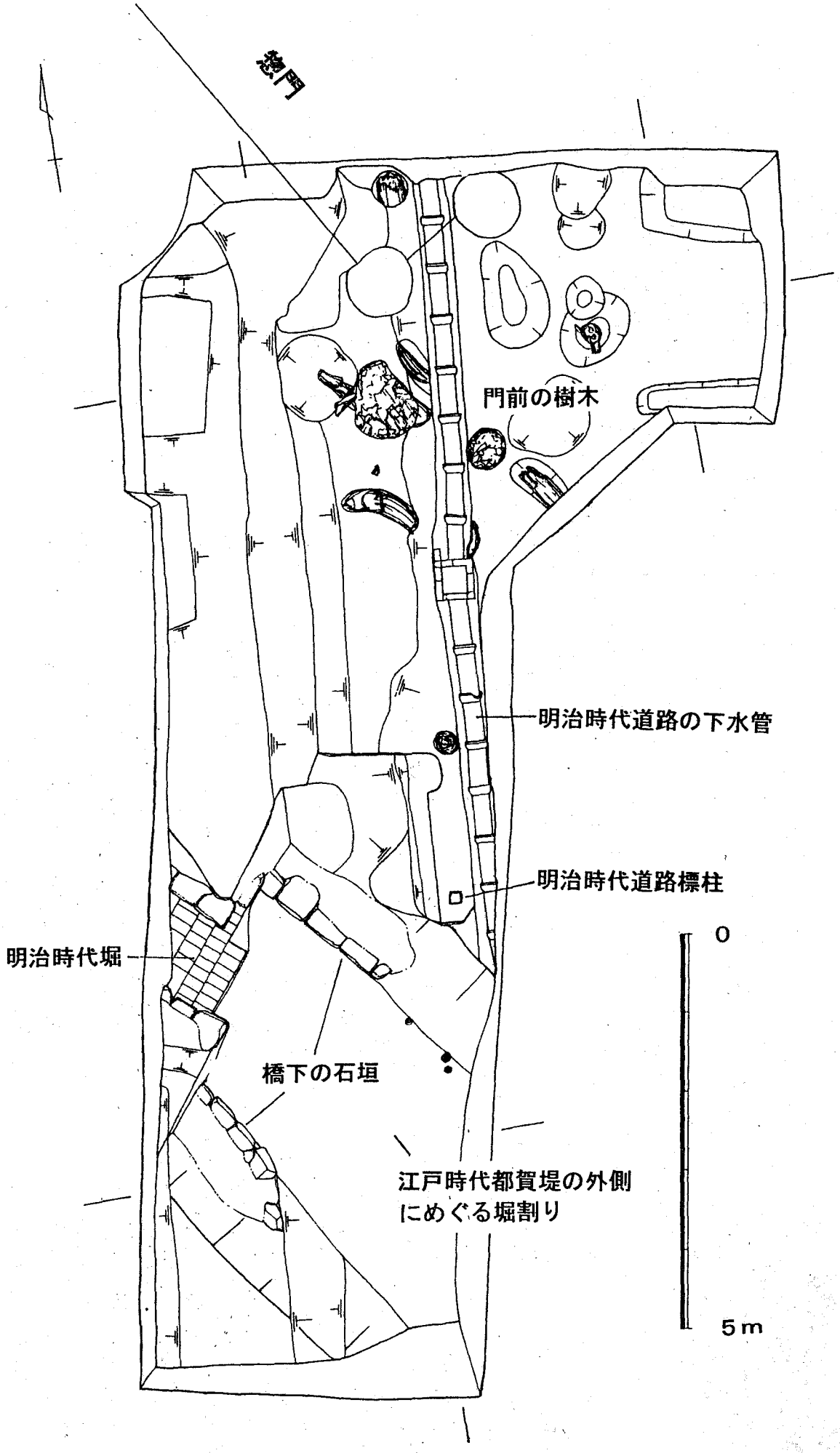
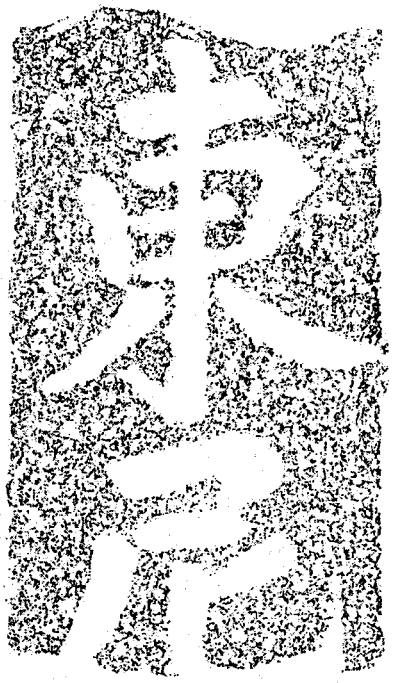

惣門
門前の樹木
明治時代道路の下水管
明治時代道路標柱
明治時代堀
橋下の石垣
江戸時代都賀堤の外側
にめぐる堀割り
0
5m

図６　調査区平面

惣門　惣門が存在したと推定される地点にも大きな撹乱があり、遺構面の遺存状況はかなり悪いものでした。そのなかで瓦片・礫を混ぜた粘土を充填する土坑２基が検出されています。これらは惣門東側本柱と控え柱の礎石の抜きあとであると考えられます。西側の礎石あとは調査区外になり確認できませんでした。ただし柳原惣門は高麗門と呼ばれる形（図９･11）であり、この二つの礎石の位置から総門の片側の扉の幅が1.8m＝一間であることが確認できます。したがって、観音開きの扉二枚で門の間口を二間と推測することができました。なお、門前の枡形に相当する部分では明治時代に伐採された数本の樹根が遺存しており、惣門前に樹木が植えられていたことも確認されています。



「従是東尼崎領（これよりひがしあまがさきりょう）」標柱

打割られて欠損する部分が多い点惜しまれますが、「是東尼」･「崎領」と同じ文字が三面（もう一面は文字なし）に刻まれている御影石製の標柱が出土しました。類例から「従是東尼崎領」と刻まれていたものと考えられ、これは「これより東は尼崎藩の領地である」という意味になります。

兵庫津が尼崎藩領であったのは天和三年（1617）から明和五年（1769）で、以降は天領となっています。したがってこの標柱は遅くとも江戸時代中期まで、おそらくは江戸時代前期に、兵庫津の西の境になる柳原惣門の門前に建てられたものと推測されます。これらの破片は明治時代以降の遺構・撹乱土から出土していますので、天領になって以降も惣門が取り壊される明治時代まで、現地に立っていたか、少なくとも現地にあったことを確認できます。

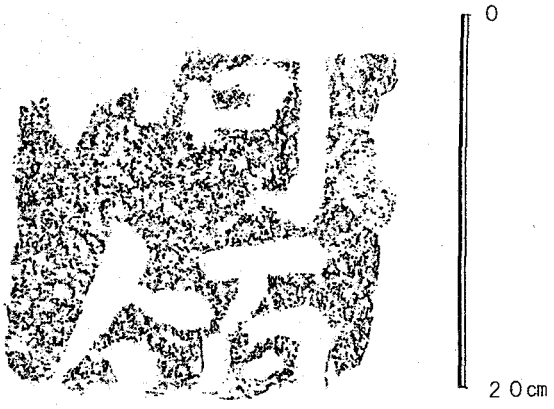


図７「従是東尼崎領」標柱

都賀堤に伴う堀

元禄年間に作成された兵庫津絵図等江戸時代の絵図（図４）には兵庫津の町の周囲に巡らされた都賀堤およびその外側に堀が描かれています。明治８年（1875）にこの堤は削平されますが、堀についてはその

後も存在していたことが明治時代の地図（図２）から確認できます。この堀についても確認でき、明治時代になって造り替えの行われていることが新たに判明しました。

江戸時代の堀

江戸時代～明治時代の地表面は現在の地表から約50cmの深さで検出されますが、江戸時代の素掘りの堀は江戸時代の地面からの深さ約1.4m、幅約３ｍをはかります。溝の両側に石垣の積まれる部分があり、この部分に堀をまたぐ橋が架けられていたものと推測されます。ほかの部分は素掘りで、法面（のりめん）を土留めする特別な施設は確認できませんでしたが、法面下端には地面に打ち込まれた木杭数本が遺存していました。

堀内に堆積した土は土壌化の少ない粗い砂が主体で、土壌化したシルトなどは客体的にしか存在しません。このことからこの堀の水はよどんだものでなく、流水があったものと思われます。堆積土には多量の陶磁器・瓦などが含まれていました。

明治時代の堀

江戸時代の堀を造り替えたもので、堀幅約1.1m・深さ約70cmと元の半分以下の大きさになり、堀というよりは溝といったほうがいいようです。この溝については調査範囲では両岸全体に石積みなどがなされているようですが、撹乱が多く確定はできません。またこの溝の底にはレンガと石材が一定の範囲に敷き詰められていました。その範囲は下層の石垣が存在する範囲にほぼ重なります。したがってこのレンガ敷きの範囲も上に架けられた橋に対応しているものと考えられます。そのほかの溝底は砂地のままです。

レンガの存在から、この堀の造り替えは明治時代に入ってのものであることは確実で、おそらく都賀堤の削平に伴って堀についても造り替えの行われた可能性が高いでしょう。レンガの上に積まれる大型の割り石石材は下の堀に残されるものと同工で、これを転用したものと考えられます。

明治の溝の底には10cm～20cmの厚さで粗い砂が堆積し、その中に多量の陶磁器をはじめとし、瓦・土人形・恵比寿面・お稲荷さん・白蛇様・灯明皿・汽車土瓶・おはじき・ビー玉・ラムネビンなどが残されていました。汽車土瓶には「ひめぢ」「まねき」という文字が書かれ、姫路駅で売られたものであることがわかります。姫路駅の開業は明治二十一年(1888)末、駅弁とお茶が販売されるようになるのは翌二十二年からです。その上層は埋め立てられた土となっていますが、汽車土瓶の存在からこの溝が埋め立てられたのは少なくともそれ以降であることが確認でき、他の出土品とあわせて考えると明治時代の終わり頃以降であるようです。

その後

明治時代の溝の埋め立ては街区の変更による道路の付け替え、あるいは拡張によるものです。その後の道路工事、水道管・ガス管・電柱・埋設管・側溝・標識などの設置・敷設により縦横に掘り返され、黄色粘土で舗装された江戸時代から明治時代にかけての道路面はほとんど残されていません。また、砂利、そしてアスファルトが敷かれ道路の舗装が行われます。

その後、昭和二十年三月十七日の空襲による火災層にこの道路が覆われます。焼土に交じり焼けた瓦、溶解したガラスなどが出土しており、戦災の凄まじさを伝えています。

そして戦後の区画整理に伴ってこの地は柳原蛭子神社の境内となり現在に至ります。

図8　明治以降の道路標石の上面に刻まれる記号

謝辞

調査に当たっては柳原蛭子神社をはじめ地元住民のみなさん・兵庫区民まちづくり会議・兵庫区役所・神戸市立博物館、そして園田学園女子大学田辺眞人先生・神戸大学黒田龍二先生ほか多数の方々に多大なご協力・ご教示をいただいており、記して感謝申し上げます。

図2〜5・9・10は柳原惣門調査会『兵庫津柳原惣門』から転載したものです。

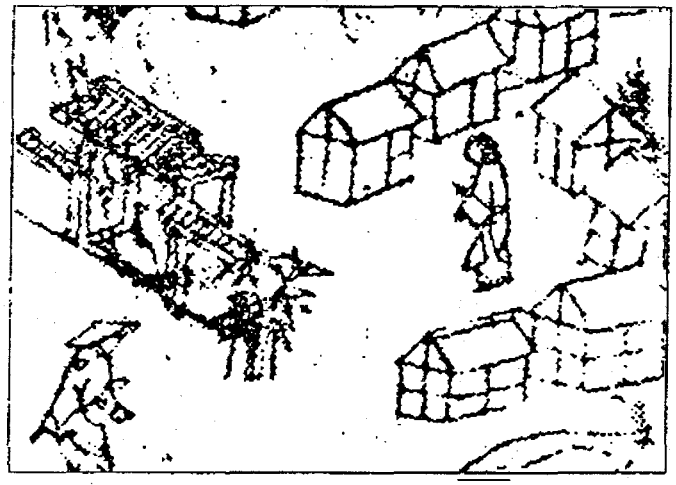


図９『福原鬢鏡』(延宝８年〔1680〕)
に見える柳原惣門

図 10 安政～万延年間の湊口惣門
(『画集　神戸覧古』1901)

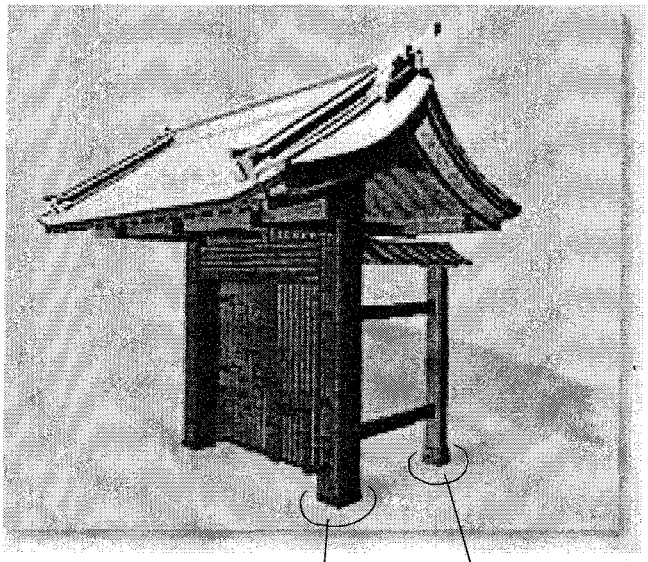


図 11　高麗門の構造

「再現金沢城 (http://shofu.pref.ishikawa.jp/inpaku/castle/look/look_top.htm)」
から引用